



# こずえ 櫓の梢から けやき

大槌町教育委員会からの  
情報を発信しています



## 競技に 応援に 魅せた地域の絆 吉里吉里学園合同運動会開催

吉里吉里学園で5月18日（日）に、小中学部合同での運動会が開催されました。小学部、中学部の共通スローガンを「全力登九」と掲げ、中学部の生徒をリーダーとして、今年度新入生まで全員が一丸となって競い合いました。



この運動会には、保護者はもちろんのこと、地域住民も参加して、競技、観戦、応援それぞれに多くの住民が白熱し、楽しんでいました。参加した地域の皆さんからは、「子どもたちの一生懸命な姿から元気をもらえる」「みんなで吉里吉里の子どもたちを見守ることで地域に一体感が生まれる」といった声が聞かれ、学園だけではなく地域全体の絆を感じる1日となりました。

来月号では大槌学園前期課程運動会、後期課程体育祭の様子をお伝えします。



児童生徒の皆さん、保護者・ご家族の皆さんへ

## 誰一人取り残さない学びの保障の実現に向け、 「けやき共育」を推進しています

大槌町教育委員会で、「けやき共育」の一環として、一人一人に応じた多様な学びの機会をつくるため、教育支援センター「けやきルーム」を設置しています。不安や悩みがあって学園・学校に行きづらい、不登校（傾向）の状況にある場合など、子どもたちが学習や生活で困らないように各学園と協力しながら必要な支援を行っています。具体的な支援（内容、時間帯、場所など）については、本人やご家族、現在在籍している学園・学校と相談しながら決めることができます。また、体験学習など自立支援のためのさまざまなプログラムも行っています。現在在籍の学園・学校、または教育委員会にお気軽にご相談ください。また、教育相談専門ダイヤル「教育なやみ相談電話」もありますので、ぜひご利用ください。

### 教育支援センター【けやきルーム】

（大槌町こども教育センター「OLAI」内）  
大槌町大槌第23地割25-25（大槌交番となり）  
学務課 TEL 0193-42-6100



### 【教育なやみ相談電話】

電話番号 0193-42-7867  
（受付：平日8:30～17:00）

## 大槌高校だより

大槌高校の学校生活や日々の様子を町民の皆さんにお伝えします！

HP



note



大槌高校HPやnoteでも  
学校生活の様子を  
発信しています！

## 大槌キャリアプログラムがはじまりました！

生徒たちの進路希望は多岐にわたっていますが、一人一人の進路目標実現に向けた指導を行っています。令和7年度からは、高校での座学と地域の企業での職場体験を同時に行うことで学びながら働く、働きながら学ぶ新しい授業「大槌キャリアプログラム」を導入しています。授業を選択している2年生は5月2日（金）、5月9日（金）に町内の農業、漁業、林業分野の企業を訪問し、現場でしか味わえない「働くこと」を肌で感じました。

生徒からは「指示されたときは簡単そうな内容だと思った。でも、想像以上に難しいことがたくさんあり、効率的に作業を進めるための工夫を考えるようになった。その自分の変化を感じられたことが面白かった」といった感想を聞くことができました。



チェーンソーの使い方レクチャー



重機の操作体験



誘引時に使用するひもの採寸・裁断



当日朝に水揚げされたサーモンの説明

## 令和7年度1回目の定点観測を行いました！



5月9日（金）に、1年生全員と復興研究会の2年生が「リーダー」として同行し、町内の定点観測を実施しました。

東日本大震災後、平成25年より年3回、令和7年度からは年2回復興の過程を記録するという目的で定点観測を継続しています。8つのグループに分かれ、それぞれ地域の皆さんから震災当時のお話も伺いました。

震災から14年が経った今、1年生（震災当時1歳）の生徒たちが復興の変遷を学び、日々の生活風景と結びつけることができました。震災の風化を防ぎ、防災意識を向上させ、地域の課題を考えるきっかけにしていきたいと考えています。

### 参加生徒の感想

吉里吉里地区で語り部さんのお話を聞いて特に印象に残ったことがあります。それは「一瞬の判断が命の分かれ目になった」ことです。家を出て右に行くか左に行くかの選択が命に関わっていたことを伺い、当時の緊迫した状況をリアルに想像することができました。いざというときこそ、落ち着くことが大切だなと思いました。



大槌高校1年  
きくち りょうすけ  
菊池 涼介 さん



大槌高校2年  
こまつ そら  
小松 空 さん

今回2回目の定点観測で、リーダーとして参加しました。定点観測に限らず震災学習などでもいつも教えられる側だった自分が、今日は教える側になったことで「伝承に自分が関わっている」と強く実感しました。後輩たちにもこの活動を引き継いでほしいですし、伝承のサイクルを若者世代が回していく必要があると感じました。